父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの
係助詞
人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のお
由緒　断定「なり」用　（ぐ）
ぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀
形容動詞・体　副詞　打消「ず」用
式をももてなしたまひけれど、取り立てて、はかばか
とり行い　ⓢ作者→北の方　過去「けり」已　形容詞・体　しっかりとした
しき後見しなければ、事あるときは、なほより所なく
（うしろみ）　副助・強意　形容詞・已　頼りとするところ←　やはり　形容詞・用
心細げなり。
形容動詞・終
（さき）
前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる
前世　宿縁　係助詞　過去原因推量「けむ」体　形容動詞・体
玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとなが
副助詞　ⓢ作者→帝　完了「ぬ」終　待ち遠しく
らせ給ひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる
尊敬「す」用　ⓢ作者→帝　使役「す」用　ⓚ作者→帝　ⓢ作者→帝　形容動詞・体
ちごの御かたちなり。一の皇子は、右大臣の女御の御
御容貌　断定「なり」終
腹にて、よせ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもて
後見　間違いなく皇太子になられる方　世間でも
かしづき聞こゆれど、この御にほひには並び給ふべく
接続助詞・逆接　可能「べし」用
大切にお世話する　ⓚ作者→一の皇子　お美しさ　ⓢ作者→一の皇子　断定「なり」用
もあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひに
打消「ず」用　過去「けり」已　形容詞・体
て、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限り
（わたくしもの）　秘蔵っ子　ⓢ作者→帝　ⓢ作者→帝　形容詞・終
なし。

（桐壺の更衣の）父の大納言は世を去って、母の北の方は、昔風の奥ゆかしさのある方で、両親がそろっていて、
現在世間の評判の際立って華やかな方々にも劣らず、何事の儀式をも
とり行いなさったが、特に、これというしっかりとしたうしろだてがないので、（何か）ことが起こった時には、頼りとするところがなく
心細そうである。

（帝と桐壺の更衣とは）前世にも、御宿縁が深かったのであろうか、この世にないほど美しい
玉のような皇子までもお生まれになった。（帝は御子が参内するのは）いつだろうと待ち遠しがられて、急いで参内させてご覧になると、珍しいほど
美しい赤ん坊のお顔である。第一皇子は、右大臣の娘である女御の
お産み申し上げた方で、うしろだてがしっかりしていて、（将来は）間違いのない皇太子だと、世間でも大事におもてなし申し上げるが、この（お生まれになった）皇子のうるわしさには比べなさることもできなかったので、（帝も）第一皇子だからというひととおりの御寵遇で、
（桐壺の更衣が生んだ）この皇子の方を秘蔵っ子と考えて大切にお世話なさることはこの上もない。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/